慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代における臨済宗寺院の坐禅会における「禅」の実践と多様な解釈
Sub Title	
Author	東島, 宗孝(Higashijima, Shūkō)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2020
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.90 (2021.) ,p.108- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度博士課程研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000090-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代における臨済宗寺院の坐禅会における「禅」の実践と多様な解釈

東島宗孝

研究背景

本研究の目的は現代日本において「坐禅」がいかに解釈され，実践されているか坐禅会という場を通じて考察し，「坐禅」への多様化した意味づけとその文脈を明らかにすることである。坐禅は「不立文字」「教外別伝」といった言語・概念を介さず修行を行う臨済宗を含む，禅宗の中心的修行方法である。しかし，特に近現代を通じて哲学・宗教学によって禅の概念化・言語化が行われ，「坐禅」も僧侶以外の大衆（以降居士）によって実践されるようになり，寺院も大衆のニーズに応じて禅堂修行を希釈した内容で坐禅会を開くようになった。坐禅会は「伝統的坐禅」と「大衆的坐禅」が交渉する場であり，「伝統」と「世俗」の間で揺れ動く坐禅が見える場と言うことが出来る。ここでの「伝統」とは従来の禅研究が参照してきた「純粋禅」，つまり禅堂内の僧侶の実践する禅である。調査方法としては参与観察とインタビュー・文献調査を用い，「伝統」と「世俗」がいかに交差し，坐禅会が構築されているのか考察し，現代日本における「実践宗教」[i]（Leach, ed 1968）としての禅を描き出す。

研究成果

2019年度は神奈川県鎌倉市に存在する臨済宗円覚寺派大本山である瑞鹿山円覚寺（以降円覚寺）の坐禅会に関する資料を収集，および坐禅会を運営する僧侶である居士林主事（以降主事）の思想背景理解のための調査を進めた。詳述すれば，鎌倉図書館における行政文書や機関誌『暁天坐禅』の読み込み・同寺院での参与観察・主事が影響を受けた「京都ダンマバーヌ」における瞑想合宿での参与観察が前述の調査内容になる。また主事の坐禅会運営方針や「伝統」に関する調査結果を国立民族学博物館にて行われた東アジア人類学会にて発表を行った。本報告書では，上記の諸成果の中でも，調査が完結した機関誌『暁天坐禅』中の参加者たちの坐禅観に注目した分析を提示し，成果として報告したい。

暁天坐禅会は円覚寺で毎日早朝6時から行われている「居士」のための坐禅会である。この坐禅会は円覚寺の坐禅会の中でも特異な点が3つある。第一に開催頻度が非常に多いことである。一般的な坐禅会は円覚寺の他の会も含め，週または月に1回というペースで開かれる。このように毎日開かれる坐禅会は非常に稀であり，継続的に通い，坐禅を実践している常連層が存在している。

第二に居士の負う役割が大きいことである。その1つが指導を介して構築される居士達の関係性である。機関誌の中には熟練の居士がかなり積極的に初心者の指導を行い，熟練者同士の親交も深い記述がある。坐禅は「無言行」という言葉を介さず，音を立てず行う修行とされており，指導も表向きに僧侶以外から言葉を通じて行われることは少ない。そのため居士同士の会話や親交は生まれにくく，禅堂の規範の中での関係性もしくは完全なる他人に留まる場合が多い。暁天坐禅会は前述の一般的坐禅会とは異なる性質の居士同士の関係性が作りあげられているといえるかもしれない。しかしながら関係性を作り上げている参加者やその性質については現地調査によって今後明確にすべき点であると考える。

第三に場所が他の坐禅会が行われる「居士林」という場所ではなく，仏殿において開かれていると言う点である。仏殿は坐る環境において通常の禅堂とは異なる。最も大きな違いは寺院の本尊である巨大

な宝冠釈迦如来などが同じ空間に存在していることである。参加者によっては坐禅中の思考が仏殿という環境に影響を受けている。このような環境の違いこそが暁天坐禅会の特殊性にもつながり，通常の坐禅会参加者の経験との差異創り出しているといえる。

今回参照した機関誌『暁天坐禅』は2015年に会の創立50周年を記念して作られたものであり，有志の作文が収められているものである。発行者は「円覚寺暁天坐禅会世話人会」とされ，収録された作文の内容からも継続的に坐禅会に通い，指導や役割を果たしてきた参加者有志の制作であることが伺える。稿の始めには現在の管長，寺院の最高位の僧侶と会を開いた朝比奈宗源老師の言葉が掲載され，その後に14名の居士の作文が掲載されている。結びには居士の1人が坐禅の坐り方を説明した文章が寺院の僧侶が実演した写真とともに掲載されている。筆者は投稿者の文章を①坐禅を始めたきっかけ②坐禅を通じての体験，③坐禅観の観点からまとめることを意識しながら機関誌を読み進めた。以下に簡単に類型化した結果を記述する。

①の坐禅を始めたきっかけとしては友人からの紹介や近所であるなど何らかの縁を頼ってくる場合と，日常の仕事や家庭の問題に悩み，何かを求めてくる場合の2種類に分かれた。そして後者の場合も禅関係の書籍を手に取る，昔経験した坐禅や茶道を思い出すなどといった導入が多い。またこの2種類の違いは社会関係によって，時には偶然性を伴って繋がるか，何かを積極的に求めて繋がるかであると言い換える事もできる。

②の坐禅を通じての体験では大別すれば，「大自然」を感じる，自然や会の中での役割に感謝を感じる，日常の悩みや感情が安らぐという3種類に関連したものが多かった。3つの分類は相互に繋がっており，普段気がつかないものを意識し，実践することで感謝の気持ちや安らぎに繋がっていることが見て取れた。また①の日常生活に悩みのある人々は普段の感情と坐禅を通じた心境の変化を詳しく記述していた。これらの経験には寺院が都市から離れ，自然にあふれた空間であることが大きく関わっている。

③の坐禅観に関してはかなり多様であるが，便宜的に「環境・自然派」と「仏心派[ii]」にわけることができる。「環境・自然派」は仏教用語や禅宗の理念追求よりも会の中の自然環境や人間関係に取り囲まれることで安定感を得，満足感を味わう層である。この層の人々は坐禅会中の主観や喜びなどを直接的に文章化している傾向がある。中には「見性（仏心への気づき）」を目指していないという文章も見られる。「仏心派」の人々は坐禅の本来的つまり禅宗・仏教における意義を体得しようと試み，禅宗の修行で到達すべきとされる「仏心」をいかに見いだすかを追究している層である。この層の人々は読書家で，禅籍や管長の言葉を用いる場合も多く，「無」や「仏心」など理想としての「禅」を文章の中に書き出している傾向がある。坐禅の語りをその中心となっている理念を以て分ければ以上のようになる。

以上が機関誌から読み取った情報の簡単なまとめであるが，ここで1点機関誌の文章，特に筆者が「仏心派」と分類した人々の多くに見られる特徴を挙げねばならない。それは文章の中に少なからず表現上の矛盾が含まれているということである。実例をあげて見ていく。

神奈川県横浜市栄区から通う60代の男性は坐禅を「無心になる」ものとしつつ，「心の置き所を会得」するものとしている。彼は坐禅を仕事における挫折体験を経験したことをきっかけとして始めた。そして坐禅をする中で怒りなどが思い出され，「調心」，彼の中では「無心の心境になるよう心懸けること」ができないと感じる。しかし「大自然の中に身を置く」ことで怒りはだんだんと感謝・受容・許しの気

持ちに変わっていったと言う。そして彼は坐禅を「自分を見つめ，心の置き処を会得する」，すなわち「仏心を磨く」ものと位置づける。

彼の言説で矛盾している点は「無心」と「心の置き処を見つける」という両立しない坐禅観が語られていることである。これはそれぞれの坐禅観の出所の違いに起因していると考えられる。「無心」は彼の中で「調心」という坐禅の説明や書籍の中にしばしば登場する実践に置き換えられている。つまりこれはある意味で「公式」，教科書通りの坐禅の理想型であると言える。それに対し，後者は彼の日常の悩みを背景とした坐禅経験の中で彼自身が得た気づきとして定着した坐禅観であり，いわば「私」的な坐禅観であると言うことができる。このように坐禅観は「公式」，「私」の領域双方に依って表現されるため矛盾しつつも両立した状態を保ちつつ各個人の中で醸成されている。

また，矛盾した坐禅観の両立状態を創り出している1つの要因が坐禅を含む禅宗の修行が基本的に「無言行」ことである。つまり機関誌は普段言葉にするべきではないと言われている経験や実践を言葉で表わすという作業を経て書かれている。これが「仏心派」の人々の文章が管長の言葉，書籍の言葉，坐禅の説明などによって構成されやすいことに繋がっている。このとき多くの場合私的な坐禅観の大部分は前述の言葉や説明によって言い換えられ，場合によっては隠匿されることとなる。

坐禅観等を機関誌の文章から読み取る時，それらが「無言行」が言語化され，様々な出典からそれが語られ，「公式」と「私」のせめぎ合いの中で語りが生まれていることを自覚すべきである。これは聞き取り調査においても同様であり，筆者が行ってきた聞き取りと参与観察を並列して行ってきた調査の意義でもある。つまり，言語化がなされる過程を考察し，言説と実践のズレを相補的に捉えながらでなければ，「無言行」の語りの考察は成り立たないということである。今回の調査では暁天坐禅会の特性理解や文字化された坐禅観の収集が達成された。また，従来の哲学等の禅研究では考察できなかった「実践宗教」としての禅を文字化された資料から抽出する方法論への示唆を得た。しかし調査の資料をまとめるに留まり，精緻な学術的議論の中で考察を深めるには至らなかった。今後は文化人類学，社会学の理論の中で今回の考察を捉え直し，調査や論文執筆に役立てていく所存である。

注

[i] 文化人類学者リーチの提唱した、哲学者や論理学者が行う神学的な教理研究とは異なる、人々の行為動機づけている宗教的原理や行為をさした用語。

[ii] 「仏心」とは禅宗において気づくことが目指される感情等に左右されない心であり、基本経典の中にもでてくる。多くの参加者の文章中に同用語が見られたため「仏心派」と表現した。

参考文献

Leach, E. R.
1968 Dialectic in Practical Religion. Leach, E. D.（eds.）CAMBRIDGE pp. 1–6
円覚寺暁天坐禅五十周年記念世話人会発行
2015 『暁天坐禅　円覚寺暁天坐禅会五十周年記念誌』